病院内にサテライト研究室

第一線で活躍する薬剤師養成へ

岐阜薬大　臨床教育を強化

岐阜薬大は、岐阜市民病院と岐阜大病院と連携協定を締結し、二つのサテライト研究室の設置に踏み切った。

6年制薬学教育で臨床教育の充実が言われている中、今回、より臨場感のある医療現場で学生が医師、看護師、薬剤師などの多職種と協働し、病院薬剤師の業務を学びながらテーマを見つけ、真の意味での「臨床研究」に取り組む環境が必要と判断した。

原栄影学長は「臨場感のある現場で学生に様々なことを感じてもらい、医師や看護師、患者さんがいる中でテーマを見つけて研究ができることは、非常に大きなメリットになる。いくら大学の研究室で臨床研究をやっても現場を知らなければできない」と意義を語る。

たりする経験が得られる。より臨床現場に近い部分でわれわれが弱かった研究の部分が進めば、患者さんにも大きなメリットになる」と話す。

薬学部の研究室を医師が主催するケースは珍しいが、笠原氏は「臨床現場で医師が様々な治療計画を立てたりする流れの中で、将来薬剤師がこういう活躍ができると見せてあげられると思う」と語る。

薬剤部と兼任で健康医療薬学研究室の准教授を務める舘知也氏は「市民病院の中に研究室ができたことによって、大学と共同研究を行えるようになる。薬剤部で働く薬剤師にも研究に関わってもらい、学位や指導薬剤師が取得できるといったメリットを学生に示すことによって、地元の病院に就職したいと思ってもらえれば」と話している。

同院にとっても、院内にサテライト研究室を設置するという新たな取り組みとなる。笠原氏は、「院内の人の行動、思考の変容が起こるのではないかと」期待する。優秀な人材を確保するためにも、臨床研究を行える環境を整えながら、研究室に学生を呼び込みたい考えだ。

笠原氏は「最初から多職種に組み込まれて学生が勉強できるのは大きい」とメリットを強調。「まずは学生に提供できるテーマを教員で考えながら、地道に成功体験を積み上げていくことから始めたい」と研究室の運営に意欲を示した。

舘氏は「以前から薬剤部に所属しながら岐阜薬科大学の教員として学生と研究を行っており、QOLに関するアンケート調査や泌尿器科の医師などと副作用に関する調査を手がけてきた。こうしたノウハウは蓄積されているので、健康医療薬学研究室では、そのノウハウを生かして学生を教育していきたい」と話している。

「健康医療薬学研究室」　抗癌剤や多剤服用に焦点

岐阜市民病院

岐阜市民病院内に設置された「健康医療薬学研究室」の特任教授には、医師で副院長、血液内科部長を務める笠原千尋氏が就任した。臨床が中心の一般病院で、薬剤師の育成と共に研究を強化したいと考え。同院薬剤部や医局との連携によって共同研究を推進する。

具体的には、抗癌剤やポリファーマシーに焦点を当て、副作用発現の危険因子を調べたり、これら抗癌剤などの医薬品の使用やポリファーマシーの要因がQOLに及ぼす影響について研究を行っていく予定。医薬品による副作用に起因する医療費や医療制度への影響についても研究によって貢献を目指す。さらに、市民公開講座などを通じて地域貢献にも取り組む。

笠原氏は「大学病院と違い、日本の実情に合わせた幅広い患者さんがいる一般病院の臨床現場で診療を見たり、調剤をし

岐阜市民病院笠原副院長・特任教授（左）、舘准教授

岐阜市民病院内に設置された健康医療薬学研究室

薬事日報社から転載許諾済み